

ただみ水田雑草考 ⑥ (最終回)

絶滅のおそれがある水田雑草

只見町はブナ林や河畔林に代表される豊かな自然に囲まれています。ひよつとしたら田んぼの中でも、ほかではすでに姿を消した種類の植物がみられるのではないかと、只見町の水田雑草を調べたのはそんな思いからでした。しかし、確認されたのはコナギやオモダカなど抽水性の種類ばかりで、ヒルムシロやミズハコベのような浮葉性の種類、ミスオオバコ、ホッスモ、ヤナギスブタのような沈水性の種類、あるいはサンショウモやイヌタヌキモのような浮遊性の種類はまったく見かけませんでした。これらはみな広布種ですから、かつては只見町にも生えていたはずなのです。

福島県植物誌(二九八七)によれば本県に生育していた維管束植物(シダと種子植物)はおよそ二

七〇〇種類、そのうち福島県ですでに絶滅した植物および将来絶滅のおそれがあるとして福島県レッドリスト(二〇一七年改訂)に掲げられた植物は四分の一にも上ります。その中には水田雑草も二〇種類ほど含まれていました。只見町にも生えているものとしては、先に紹介したミズマツバ(蒲生)やウリカワ(小川坂田)のほかアギナシ、コホタルイ、シズイな

どの抽水性の種類があります。アギナシは、オモダカに似た矢尻形の葉を持ち、葉柄の付け根に小さな珠芽(むかご)をたくさん生じ、めずらしい性質があります。養分の少ない立地を好み、むしろ湿地植物としての性格が強い種類で、只見地区の山麓にある古い休耕地に生えていました。コホタルイは、イヌホタルイより穂が小さく苞葉が長いのが特徴で、蒲生地区



▲シズイの標本(2014.9布沢産)



▲アギナシ(2014.9只見の休耕地)

の耕作田にわずかに残っています。シズイは、茎の横断面が三角形で花序に枝のあるカヤツリグサ科の植物で布沢地区の耕作田でみられました。いずれも、イネの収量には影響しない程度の適度な共存という印象を受けました。

生物を絶滅に追いやる要因の八〇%は森林の伐採、各種の開発行為あるいは水質汚濁など人間の生産活動や生活にともなうものだとされています。田んぼの場合、農業の影響が大きいほか、表土を掘削するほ場整備事業も工法によっては無視できない外圧となり、耕作田にわずかに残っています。一方では、耕作の放棄による植生遷移で姿を消したという例も報告されています。水田雑草は、水の供給と土壌の攪乱が継続されていないと陸上植物との競争に負けてしまうのです。きつと彼らも何らかの形で自然界の微妙なバランスにかかわっているに違いありません。耕地に生物多様性を期待するのは無理としても、雑草をまったくなくすということではなく、農業生産に支障のない範囲で適度な共存関係を保つという選択があってもよいのではないかと思います。